

<p>これからの人生において、再度パワレス状態が訪れるとすれば、予想される出来事は何か</p>	<p>・身体機能は今がピークであるので、これから身体機能が下降していく(特に2次障害)ことが心配である。</p>
<p>自分が幸せになっていくために、どのような力を付けていきたいと考えられていますか。</p>	<p>・親も妹も理解があり協力もしてくれる。本人重視でアドバイスもくれるので幸せである。しかし、そのため家族に対して甘えているところも多く、守られていると感じることがある。自分では狭い世界でしか生きていないように思う。自分は短気であり、思っていることが態度に出てしまう。もつといろいろな人と出会って、人から何か言われたときは短気な姿をみせず、きちんとした対応ができるようにしたい。時間はかかっても対人関係を築いていきたい。</p>

調査者所見

- ・今後の自分について不安を感じ、これからどうしようか悩んでいる。
- ・大学の通信教育を勉強したり、勉強会や旅行にも参加したりと、意欲的に物事に取り組んでいる。自分についてよく理解しており、何かやりたいことをみつければ、進んでいく力をもっているように思われる。

事例概要と分析

本事例は、出生時に障害をもち、養護学校・職業訓練校・授産施設を経て単独生活を行うに至った事例である。学校時代(思春期)に障害認識や受容で悩み、進路で悩み、そして成人後は親からの独立問題や恋愛で悩みと、具体的な課題の違いはあるものの、正常な成長をしてきた事例である。

大きく違うのは、成人後単独生活に踏み切ることが出来たか否かにあり、単独生活を主体的に行うことで、苦勞はあるものの自己実現に向け現在発展中の事例と考えられる。

家族については、おおよそ障害児を持った家族が行うのと同じように障害を尾持つ我が子の力を低めに評価し保護的に判断することはあるものの、基本的には本人自身もつづける力を信じながら関係をもっている家族であるといえる。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

- ・ 調査者が指摘したエピソードは44件である。そのうち、
 - ① パワレスになったと判断したエピソードは10件、
 - ② エンパワメントしたと判断した場面は25件、
 - ③ パワレスになった側面とエンパワメントである側面を同時に含むと判断したエピソードは0件
 - ④ 各々に影響を及ぼしたと思われるエピソードは9件、

2. パワレス状況

- ・ 出生時の障害であり、乳幼児期に本人がパワレスと感じたかあるは、パワレスとなったかは不明。

- ・ 調査時現在までにおいて、パワレスの状態となったと考えられる時期はおおむね3期存在する。
 - ・ 第1期は、養護学校小学部入学から中学部までの間であり、周囲の人間や訓練などを通じて障害を認識する時期である。この時期は人格形成期に当たり、時に自殺を考えるなどかなり精神的な葛藤が人格の未熟さとあいまって内面的つらい状況であったと推察される。
 - ・ 第2期は高校を卒業後、職業訓練校に進路をとらざるを得ず、さらに職業訓練校終了後に就職がなく、授産施設を利用するに至った時期であり、社会参加に対する制限を具体的に体験した時期である。
 - ・ 第3期は、単身生活をしたいという希望を親に反対された時期である。ただしこの時期は、本人の単身生活に対する意識が明確でしつかりしており、周囲の状況を乗り越えようと主体的に努力した時期でもある。
 - ・ 恋愛について家族の干渉を受けることもあったが、これは親から見れば本人にふさわしくないとと思われる相手であつたため干渉を受けた側面もあり、障害をもつが故に起こつたこととは一概に言えないと考えるところである。
3. エンパワメント状況
 - ・ モデル別に見ると、I型が突出しており、既存の社会資源が薄い中で本人が努力している様子がうかがえる。
 - ・ II型モデルとなっている個所は、養護学校当時、理解ある不動産屋と出会えた時点、生活支援センターでの支援の3つである。
 - ・ III型モデルは最も少ない。養護学校当時の担任教師の対応がまずここに該当しているが、偶然このような担任にめぐり合えたことが幸いしているとも考えられ、誰しもがこのようなチャンスを得られるわけではない。これ以外では、単独生活前後からの支援センターのかかわりが中心である。
 4. エンパワメントタイプの変化
 - ・ 出生から中学校時代までは、ほとんどI型である。ただし、学校生活を送る中ですとレングスを高めていったものであり、学校等環境要因も影響を及ぼしている事柄、II型との複合的な要素がある。
 - ・ 高校時代以降はめぐり合った担任教師がよき相談者としてIII型を示す部分が出てくる。
 - ・ その後本人の精神的な成長と併せI型中心としながらもII型、III型も併せて出てきている。
 - ・ 以上のような変化は、乳幼児期から障害をもつた人々に良く見られる変化のプロセスのように思われる。
 - ・ 課題は、これからの人生を決める学校卒業前後にどのような支援を得られるか、あるいはどのように主体的に動くかによってその後のエンパワメントに差が生じるところにあるのではないかと考えられる。
 5. まとめ

単独生活を始めた以降のヒストリーを除いて、本人が送ってきた生活は、人生の早いステージで障害を負った人の多くがたどる経過ではないかと考えられる。家族特に親の努力によって守られ、ある程度限定され、選択肢が少ない資源(養護学校等)を何とか利用しながら成長をしていく。その中で幸い良い教師などにめぐり合うことあれば、その逆もある。精神的な成長と障害の認識の間で、ストレスを抱え自虐的な経験をつむ。その中で必死に自分らしさを追及するが、環境やそれとのかかわりの如何により、生活の質が大きく変化する。家族との関係、教師との関係その他周囲との関係が重要である。

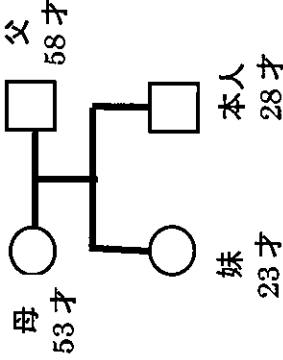
幸いこのケースは、理解ある家族と教師、そして支援センターとの関係が出来たことなどにより、本人の主体性が育まれそして伸びたケースと言える。

特に授産施設以降の経過を見ると、それは明らかであり、本人に主体的に生きる気持ちがあつても、それを理解し支援してくれる資源がなければここまで伸びたとは考えにくい。

本人は、体力的に今がピークと判断した上で、今出来ることを増やそうと言う前向きな気持ちを持っている。また、自身が家族などにまだ甘えた存在出たことも客観的に自覚している。そういう本人をアシストする支援センターの存在は現在そして今後も不可欠である。

○ エンパワメント事例5

氏名: 高山 考二郎	年齢: 28 歳	家族構成
障害名: 進行性筋ジストロフィー症(デュシェンヌ型による)		
手帳・等級: 四肢体幹機能障害		
居住地住所: 〒 京都市 ○○区 □□町 電話番号: 075-		
住環境(バリアフリー関係): 本人が車いすで入れる部屋を増築(入り口の段差を少なく、戸口を広くする) 電動ベツド・洗面所の設置 ポータブルトイレ使用 浴室への移動と浴槽への介助のため近く改造予定		家族3人でくらししている 妹は東京で一人暮らし



暦年齢	出来事(生育暦)	パワレスな状況になった事柄	エンパワメントしていく契機となった事柄		状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性						
			分岐点	心的状況		引き戻した力	I型 個人因子強化	II型 環境因子強化	III型 相互関係強化	本人の意図	他者の意図	他者の偶然			
7ヶ月	【就学前①】 昭和51年生 脱水のため入院し、その時たまたま受けた検査で筋ジストロフィー(筋ジス)の疑いが生じる。 3ヶ月おきに血液検査をする。		ある人との出会い・研修への参加・両親の病气や死・その他	好きな人ができた・自立心が芽生えてきた・その他	↓										
5歳	【就学前②】 私立幼稚園に入園する。 歩行はできていたが他の園児より走る速度が遅かったり、起き上がるのに時間が掛	②定期的な通院の必要が生じた。			-										

	階段の昇降や移動は教員と生徒が協力し、トイレ介助は担任の先生にしてみよう。毎日の送迎は母親が付き添う。	⑤教員・クラスメイトが学校内の介護、母親が通学送迎を担う。			⑤教員・クラスメイト・母親の協力が成立に学校生活が成立しない。	-						
15歳	【学齢期③】 公立高等学校に入学する。学校内でも母と過ごすことが多かった。	①母との通学に起因して、友人関係が制約される。			①送迎介護を母が担わねばならない状況であった。	-						
	友人から「言いたい事を言っていない」と言われた。	②本人の意思表示を友人と会話した。	②遠慮している自分に気がついた。			↑						
	徐々にではあるが自分の思いを伝えることができるようになってきた。					-						
18歳	【高等教育①】 私立大学に入学する。設備が不十分でサークルに入ることができなかった。	①大学の物理的設備が未整備であった。			①サークルに加入したいという思うが生じる。	↓						
	大学から依頼された介護ボランティアの学生が週に3日、学内にいる間の授業・食事・トイレ介助を行う。					↑						
19歳	サークルボックス棟にエレベーターが設置され、ボランティアサークルに入る。	②サークルボックスがバリアフリー化された。				↑						
	夜間(寝るときのみ)に人工呼吸器を使用することになる。	③人工呼吸器なしでは寝ることができなくなった。	③人工呼吸器の使用を開始した。	③「しんどくなったらどうしよう」という思いから、精神的に落ち込んだ。		↓						
20歳	4回生になり単位も十分に取得したので大学に行く機会が減った。					-						

	昼間も少しずつ呼吸器をつけるようになる。	④人工呼吸器なしでは日中も過ごせなくなった。	④人工呼吸器の使用機会が増加した。	④家から出ると呼吸が苦しくなるのではないかと不安に陥る。	④疾患が進行する。	↓						
22歳	【卒業後】 1年半ほど家に閉じこもる。大学に行かなくなり、行く場所が完全になくなった。	①日中活動の場を失う。	①大学を卒業する。	①肢体不自由者への福祉施策以外での参加機会が少ない社会状況があった。	↓							
	A病院で半年に1度、検査入院(1回の入院期間は1週間で、周りにいる同じ障害をもつ人たちを見て障害を受け入れなければならぬと感じる一方で落ち込んだ。		②自身の罹患している疾患と向き合いう。	②障害を受け入れなければならぬと感じる一方で落ち込んだ。	↓							
23歳	検査入院中に同室の患者から、B養護学校時代の人たちの集まり(B養護ネットワーク)に参加しないかと勧誘を受ける。		③同疾患の患者活動に参加する。	③引きこもりがちだった所から、外に出てみようと思いはじめ。	↑							1
	B養護ネットワークの手伝いをして、B養護学校の先生から紹介されたC作業所を利用して、週2回のDデバイスに通う。		④B養護学校の先生からの働きかけと、C作業所やDデバイス利用の開始する。	④B養護学校の先生からの働きかけと、C作業所やDデバイス利用の開始する。	↑							1
24歳	C作業所の所長は何事に関しても、親ではなく自分に聞いてくれた。 C作業所の所長から紹介されたD支援センターを利用する。		⑤自分へ問いかけてくれる職員と出会った。	⑤自分へ問いかけてくれる職員と出会った。	↑							1
					↑							1

27 歳	年に1~2回、講演活動を行う。	④定期的に講演する機会を得る。		↑		1			1
28 歳	A病院で年に3~4回のペー スで検査入院を受けている。 (1回の検査で1週間入院す る。)			-					
						6	7	8	4
									8
									8

これからの人生において、再度パワレス状態が訪れるとすれば、予想される出来事は何か	進行性のため、障害が重くなって外出できなくなるかもしれない。
自分が幸せになっていくために、どのような力を付けていきたいと考えていますか。	多くの人の前でもっと話したいので、話のネタを増やし話す力を身につけたい。 同じ筋ジズスの人にも話したい。

調査者所見

- ・ 優しいような顔つきと穏やかな性格から、周りの人からの印象がよいと見受けられる。
- ・ 家に引きこもっている期間が長かったが、C作業所所長との出会いをきっかけにいろいろな集まりに参加し、そこでまた人との繋がりができていき、今では講演活動をするまでにいたっている。
- ・ 障害が進行性であることから、不安が常に付きまとっている。

事例概要と分析

本事例は、「進行性筋ジストロフィー症(デュシェンヌ型)による四肢及び体幹機能障害」により、車いすを利用していき、障害が進行し重度化していく中で、大学を卒業するまで一般の学校で頑張り続け、母親との二人三脚で生きてこられた男性である。考二郎さんは、コミュニケーション能力も高く、聞き取り調査も問題なく可能であったが、本人と母親が常に同じ体験をしてきているという観点から捉えると、両者の「F支援センター」への受け取り方における相違点が興味深いということもあり、母親からも聞き取りを実施した。客観的な事実だけではなく、母親の愛情や想いが多分に含まれていると思われる部分も含まれているが、母親の力量というものが障害をもつ子のエンパワメントに対して大きな影響力を持っていることが読み取れる事例である。

本事例は、幼稚園から大学に至るまでを障害のない人たちと共に生活しており、医療と教育に関するサービスを受け、福祉サービスとは全く縁のない場所にいたが、病院で知り合った障害をもつ人から福祉サービスを紹介され、それを契機にしてエンパワメントしてきた。そして、自分の目標となる人物と出会い、障害をもつ人たちと語り合い、福祉サービスを利用した外出も増え、講演にも呼ばれるようになり、本当の生き甲斐を見つけてエンパワメントしてきた。福祉関係者との出会いは、彼にとつての大きなエネルギーとなり、自分の目標が見つかったことが分岐点となっている。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

研究員が指摘したエピソードの総数は37件であり、その内訳は次の通りである。

 - ①パワレスになったと判断したエピソードは、8件
 - ②エンパワメントであると判断したエピソードは、19件
 - ③パワレスになった側面とエンパワメントである側面を同時に含むと判断したエピソードは、0件
 - ④分岐点ではあるが、パワレスともエンパワメントとも判断できないエピソードは、10件

2. パワレス状況
 - ・ 両親を初めとする周囲の人たちから暖かく見守られ育てられてきたので、パワレスになる状況にはならなかった就学前であったが、小学校の登下校は、母親が付き添うという条件で入学が認められた。
 - ・ 現在に至るまでは、検査入院を除いて、入院生活に入ることなく、家族と一緒に暮らしたいという思いが強く、周囲の人たちにも恵まれ、在宅生活を継続してきているが、障害が進行していく度に、パワレス状態に陥ってきた。
 - ・ 大学で単位を取得するまでは、通える場所が存在したが、皮肉なことに3年生で卒業単位に達してしまっただけで、4年次は大学へ行く機会が極端に減少し、社会との接点を持つてなくなったという実感で、こんな状況が続くのかと不安になった。
 - ・ 障害をもつ友人も増え、ホームヘルパーやガイドヘルパーとの関係も築き、エンパワメントした状況にはあるが、障害の進行を感じるとパワレスな状態になってしまう。

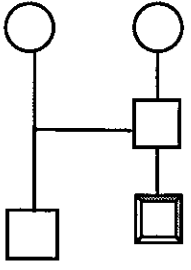
3. エンパワメント状況
 - ・ 小・中学校の時代は、教員やクラスメイトが協力的であり、過保護的と呼べる程に親切であったので、パワレス状況も生まれずに、エンパワメントも必要なかったと言える。
 - ・ 周りから護られる存在として見られてきたが、高等学校に入ると、対等として付き合ってくれる者が目の前に現れ、「言いたいことを言っていない」と言われたことが、エンパワメントしていく結果となった。
 - ・ 大学に入って、母親の介護が占める割合が若干ではあるが減少してきたことは、他者との関係を築いていくことに喜びを感じるようになり、ボランティア・サークルの活動にも積極的に参加してエンパワメントしている。
 - ・ 福祉関係者と出会って、人生の目標を定めることができた高山さんは、水を得た魚の如く、エンパワメント過程が継続している。特に、講演会に呼ばれることは、何もできないと思いついて自分で自分を必要としている人たちもいるのだという自信にもつながっている。

4. エンパワメントタイプの変化
 - ・ すべてのモデルについて、大学へ進学した以降に、急激に変化していることが読み取れる。
 - ・ 乳幼児期から障害をもつ人たちの特徴であると思われる個人のストレングスを大きくしていくI型が福祉サービスと出会うまでは見当たらず、他者(母親が主)が主流となってきた人生であったということが、II型やIII型が多数であることから推測できる。
 - ・ 逆に、大学時代や卒業後には、個人のストレングスに関係するI型が極端に増えてくると思われがちであるが、実際には伸びることもなく、周囲の者に気を遣いながら、あるいは依存ということに安心感を持っているのではないかと思われる。
 - ・ イベントの必然性を見ると、「本人の意図」という項目にチェックが少ないことが気になる。上でも書いているが、自分の意思を明確に伝えて、行動していくときに躊躇するものがあるのかも知れない。

5. まとめ

本事例は、進行性の障害をもった人が、パワレス状況とエンパワメント過程を繰り返していく典型例である。難病として捉えられ始まる筋ジストロフィー（特にデュシェンヌ型）は、発病が幼児期であるが故に、周囲から過保護的な関わり方の中で成長してくる者が多い。そのために、自分で決定することや主張することが苦手となってくる場合が多い。この事例は、大卒を卒業した後に、障害をもつ人たちや福祉関係者と出会ったことにより、自己決定や自己主張の重要性を感じ取ったと考えられる。進行性障害という状況の中で、重度化していく身体に対して、幾度となくパワレス状況を作らざるを得ない今後を考え、より多様な福祉サービスや環境整備を現実のものとしていき、エンパワメントしてもらいたい。

○ エンパワメント事例6

氏名: 今井 寛二	年齢: 24 歳	家族構成
障害名: 脳幹損傷による体幹機能障害		 <p>幼児期、父親の仕事が忙しく、子どもとあまり関わりを持たなかった。主な養育者は、母親であり、事故前から家族の輪の中にはいることより、知人との交流を大切にしていた本人も、時折、母親の側で思いを伝える場面はあった。兄妹との関係も事故後の方が良い関係が結んでいる。父親も事故前に比べて関係を求めてきており、お互い不器用ながら関係が結んでいる様子。また、母方の祖母が幼児期から大好きで現在も交流がある。</p>
手帳・等級: 1種 1級		
居住地住所: 〒 広島県 ○○市 □□町 電話番号:		
住環境(バリアフリー関係): 2階建ての持ち家。車寄せから、玄関まで、ゆるやかなスロープとなっており、玄関も引き戸で利用しやすい。玄関ポーチからもゆるやかなスロープで室内は、手動式の車いすを利用。居室も玄関横のフロアリングの部屋で、リハビリ器具がおかれているが、過ごしやすい環境。浴室・トイレに関してもかなり、広いスペースが取られている。2階への移動についても、エレベーターを利用。		

暦年齢	出来事(生育暦)	パワレスな状況になった事柄	エンパワメントしていく契機となった事柄		状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性		
			分岐点	心的状況		引き戻した力	I型 個人因子強化	II型 環境因子強化	III型 相互関係強化	本人の意図	他者の意図
	【受傷前】 市内保育所に通っていた。	①自分では何もできないう子として評価されていた。	・ある人との出会い ・研修への参加 ・両親の病气や死 ・その他	・好きな人ができた ・自立心が芽生えてきた ・その他	↓						
	市内幼稚園へ転入する。	②転入した、幼稚園では、本人の行動を受け入れてくれた。	①集団の中でよく泣いていた。 ②幼稚園が楽しくなった。	①保育所の人たちが無理解であった。	↑		1			1	

6 歳	<p>兄・妹と歳が近いことから、家庭では、自分のことは、自分で取り組むように躰をされていた。</p> <p>特定の友だちができず、集団の中で遊ぶことを選んでいた。</p> <p>1年生の終わり頃に、特別にスポーツ少年団に入った。</p>	<p>③「自分で早くやりなさい」と言われ、ダメな子と評価される。</p>	<p>⑤スポーツ少年団に加入をみとめられた。</p>	<p>③自分はダメな子なのかと思い込んだ。</p> <p>④特定の友達ではなく、仲間の一人として遊びたかった。</p> <p>⑤スポーツを通じて、人との関わりが面白くなってきた。また兄・妹と過ごすことより外で仲間といっしょに居たかった。</p>	<p>③母親の厳しい躰があった。</p>	↓													
12 歳	<p>低学年までは、弱々しく家庭では叱られる場面が多かった。</p> <p>市内の中学校に入学する。勉強が好きではなく、サッカー一部に所属した。</p> <p>本人の知らないところでキャプテンに任命され、断れなかった。</p> <p>3年生の時、クラスの人たちとは話さなくなった。</p> <p>3年生の担任でクラブ顧問に話を聞いてもらい、教会を紹介され、利用するようになった。</p> <p>市内の私立高等学校に進学する。</p>	<p>⑥兄や妹よりも叱られる回数が多く、落ち込むこともあった。</p> <p>⑦キャプテンになることを断れなかった。</p> <p>⑧クラスの人と話すことが嫌になった。</p>	<p>⑥母親の厳しい躰があった。</p>	<p>⑦友だちが信じられなくなった。</p> <p>⑧クラスの人と話すことが嫌になった。</p> <p>⑨教会で話を聞いてもらい、精神的安定につながった。</p>	<p>⑥母親の厳しい躰があった。</p> <p>⑦友達に裏切られた。</p> <p>⑧クラスの人と話すことが嫌になった。</p> <p>⑨両親は、教会へ行くことに反対していた。</p>	↓													
15 歳																			

目つきが悪く、喧嘩好きで怪我をさせることも多く、担任に「謝りに行け」とよく言われた。	⑩喧嘩をしては、相手に怪我をさせ、よく謝りに行かされた。		⑩自分の強さを示したかった。	↓					
2年生、3年生の担任とは仲良く話すことができた。	⑪よく話を聞いてくれる担任と出会った。			↑		1			1
大学への進学を決め、まじめに勉強をするようになった。			⑫大学進学が目標となり、まじめに勉強をする気持ちになった。	↑		1			1
高卒で働くのではなく、大学とアルバイトを両立しようとした。	⑬両親から就職するように求められた。		⑬自分で働いて、学費を稼ぎだす気持ちになった。	↑		1			1
〇〇短期大学へ進学した。									
アルバイトを通して、交友関係が広がった。	⑭アルバイトで複数の友人と知り合えた。			↑				1	1
家族と過ごすより、仲間と過ごすことが楽しかった。			⑮仲間と過ごす時間が、楽しかった。	↑				1	1
短期大学入学直後に、ヘルメットを着用せず、バイク事故を起こす。				-					
18歳	【受傷後】 〇〇市総合病院へ搬送される。								
	10日間も意識がなく、医師からも説明がないので、両親が転院を決めた。			-					
	〇〇記念病院へ転院した。			-					
	転院後、3ヶ月間も意識が戻らなかつた。			-					

かったので、大学には行かず、働くことを両親は望んだが、アルバイトをしながら大学に行くという決意を固め、短期大学へ進学した。家族といえるよりも友人といえる方が楽しいという言葉を口にし、自宅に寄り付かないこともあった。短大へ進学して間もない頃に、ヘルメットを付けないまままで事故にあった。生死の境をさまよい、3ヶ月あまりも意識がなかった。母親は、意識が戻ることを信じて看病を続け、現在も多くの時間を彼と共に過ごしている。

受傷後の4年間は、リハビリを受けるという目的で、さまざまな病院を転々とし、自分の身体に対するイライラ感や絶望感、そして家族も暗くながりかな日々が続いていたが、地域の自立生活支援センターと関係を持つようになり、障害をもつ人たちや関係者からの多様な刺激を受けることにより、人生の分岐点となっている。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

研究員が指摘した受傷後のエピソード総数は、44件であり、その内訳は次の通りである。

- ①パワレスになったと判断したエピソードは、8件
- ②エンパワメントであると判断したエピソードは、22件
- ③パワレスになった側面とエンパワメントを同時に含むと判断したエピソードは、0件
- ④分岐点ではあるが、パワレスともエンパワメントとも判断できないエピソードは、14件

2. パワレス状況

- ・ パワレスになったエピソードが2件という数字は、通常で考えると少な過ぎると考えられるのかも知れないが、バイク事故による受傷というのが全てのパワレス状態を超越していると考えられる。
- ・ 受傷後のパワレス状況は、意識を回復した直後に、自分の身体が思うように動かないと実感し、リハビリの効果が上がらないという事実と直面したときが最初であった。
- ・ 通院でリハビリを受ける日々が続き、在宅での生活を余儀なくされていた21歳の頃は、毎日が面白くなく、こんな生活が続くと考えると、パワレスな状態となっていた。

3. エンパワメント状況

- ・ 退院後、県立リハビリテーションセンターに通院しているときに、スポーツマンが気持ちを切り替えるという話を聞いて、自分も気持ちを切り替えようと考えようになると、気分が楽になってきた。
- ・ 19歳の終わりになり、受傷後に服用していた薬が必要なくなったことで、全てのことを前向きに考えられるようになった。
- ・ 19歳のとき、休学扱いになっていた短大へ復学し、母親とともに授業を受けた。20歳のとき、短大が閉鎖されることになり、全員が無条件で卒業させてもらえることになり、すぐラッキーだったと感じていた。
- ・ 22歳の終わりに地域生活支援センターと出会い、23歳のときにピアカウンセラー養成講座へ参加して、同じ障害をもつ友人や講座スタッフとの関係が深まり、自分の思いを伝えられるようになってきた。
- ・ 時を同じくして、プールに入りたという気持ちが高まり、障害をもつ人々を対象としたスイミングクラブに入り、泳ぎ始めたことが契機となり、仲間や母親たちから大きな刺激を受け、より前向きに生きること、母ばかりではない介護体制に関心を持つようになってきた。
- ・ 23歳の終わりに、地域生活支援センターの「ピアサロン」で企画した新幹線旅行の担当者となり、みんなの意見や要望をまとめ、実現させたことで大いなる自信につながった。また、旅行を通して「他人との関わりを持つには、自分から話しかけていくことだ」と自覚した。
- ・ 24歳になり、ピアカウンセラー養成講座も2年目に入り、自らがリーダー的な存在となり、活発に発言するようになった。また、スイミングクラブの合宿にも母親なしで参加するなど、母親との距離というものを考えるようになってきた。

4. エンパワメントタイプの変化

- ・ 受傷後は、母親という環境因子が様々な決定に関与するようになり、II型のエンパワメントが台頭するようになった。
- ・ III型が数多く出てきてはいるが、これも母親が個人と環境(リハビリ関係)を上手にコーディネートさせてきたものと考えられるので、II型の特徴を大いに持つ形と考えるのが妥当である。
- ・ 最近になり、自分の精神的なストレスを高めようとする考え方が出てくるようになり、今井さん自身がエンパワメントしていこうとする意思が出てきたと捉えることができる。

5. まとめ

バイク事故による高次脳機能障害をもつ本事例は、この障害の特徴でもあるが、自分に対する自覚や認識をどの程度持っているのかが把握し難いところがある。受傷前と比べると、性格が変わったと母親は答えてくれたが、本人の記憶が薄れているだけに確認は難しい。中途障害を受けた人たちの事例では、ここまで母親がリハビリに力を要れ、コーデイネーター的な役割を發揮している例は少ないと思われる。受傷後6年を経過したが、社会との関係を比較的早く持っていることや、会話のリハビリ効果が高いと思われるのも、母親の献身的な努力に起因するところが大きいと推測することができる。この事例のように、環境因子の一つである母親というキーパーソンが大きく機能することにより、エンパワメントが進行していくという典例として考えられる。

今後の展開としては、本人が母親から精神的に独立した形で、エンパワメントしていこうとするときに、彼の支えとなるものを見つけ出す必要があると思われる。

○ エンパワメント事例 7

氏名: 田野倉 淑子	年齢: 34 歳
障害名: 先天性骨形成不全症による四肢機能障害	
手帳・等級: 1 種 1 級	
居住地住所: 〒 広島県 ○○郡 □□町	
電話番号:	
住環境(バリアフリー関係) : * 玄関、トイレ、風呂、台所を本人用に改修をしている。 * 市街地から自宅までは近い、一部急坂あるが電動車いすで移動可能。	
家族構成 父 1939 (68 才) 母 1943 (61 才) 姉 1968 (36 才) 地方公務員 本人 1970 (34 才)	

暦年齢	出来事(生育歴)	エンパワメントしていく契機となった事柄		状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性		
		分岐点	心的状況		引き戻した力	I 型 個人 因子 強化	II 型 環境 因子 強化	III 型 相互 関係 強化	本人 の 意図	他者 の 意図
0 歳	【就学前】 誕生	ある人との出会い・研修への参加・両親の病气や死・その他	好きな人ができた・自立心が芽生えてきた・その他	-						
3 歳	生後1ヶ月で先天性骨形成不全という診断を受ける 両親が病院周りをして、母親の苦悩が始まった 不治の症状であることを医師から言われ、命の期限を告げられる	パワレスな状況になった事柄 先天性骨形成不全症として出生	両親の反対・社会の偏見や差別・その他	-						

6歳	他の人と違う身体であることに気付く。立てないことを問いかけた時に、母親の表情が変わった	①自分の命の期限を知り、漠然とした死への恐怖を抱く		①母親に歩けないことを聞いてはならないことを自覚した									
6歳	【学齢期Ⅰ】 小学校の就学猶予の決定	①小学校に行けない	①小学校に行きたかった	①学校に行きたかった	①就学免除の決定	↓							
	姉の参観日等で母親と外出する機会が増えた		②母が本人を連れ出すことで周囲の理解を得ようとした	②家から出られて嬉しかった		↑					1		
	偏見から姉がいじめられ、母親が連れ出してくれなくなった	③家から出してもらえなくなった		③自分から外出すると言わなくなった	③母親が外に連れ出した	↓							
	姉がいじめを受けるのが自分の存在のためであることを知り、自分から外出すると言わなくなった					↓							
8歳	教師派遣(単町委託)が始まり、先生が家に来てくれるようになった		④教育が受けられるようになった	④先生に会えるようになった		↑						1	
9歳	養護学校(訪問学校)への入学が許可された		⑤学校に入ることができた	⑤小学生になれて嬉しかった		↑							1
	人の顔色を伺うことが上手くなる					-							
10歳	訪問教師の対応が悪く勉強が嫌いになる	⑥勉強が嫌いになってきた			⑥教師が悪質な態度で接した	↓							
11歳	外出機会が減り、留守番が多くなったので、一人で考え込むことも増えてきた	⑦留守番がより多くなった		⑦死に対する恐怖、命の期限をはっきりと感じてきた	⑦外出の機会が減り、何かと考え込む時間が増え、悩みも増えた	↓							
12歳	教師と親の間に挟まれ、自分の立場を見失い、やる気がなくなった	⑧自分の立場を見失い、やる気なくなる			⑧教師と親の関係が最悪になった	↓							